

「人材育成講座” Social Mirai Design” 成果報告会」実施報告書

<概要>

「大阪市住之江区」「大阪市浪速区」「尼崎市三和本通り商店街」。3つのエリアでフィールドワークに取り組んだメンバーによる「公開プレゼンテーション」を一般公開形式で実施しました。

日程：12/21(土)11:30-16:00

場所：グランフロント大阪 ナレッジサロン プレゼンテーションエリア

ゲスト：各地域のコーディネーター

ファシリテーター：NPO法人Co. to. hanaスタッフ

<主な内容>

最終オリエンテーション

プレゼンテーションに向けた最終確認のために、受講生向けのオリエンテーションを実施しました。全体の流れと注意事項等を確認しました。また、プレゼンテーションに臨む受講生に対して、これまでのSMD登壇講師からテキストメッセージ、及び、オンラインメッセージをいただきました。

イントロダクション

Social Mirai Design の趣旨について、NPO法人Co. to. hanaの西川氏から、説明がありました。その上で、公開プレゼンテーションの趣旨と流れについて、進行から説明をしました。その後、9月からのSMD活動の様子をまとめた動画と写真から、これまでの活動の経過を共有しました。

プレゼンテーション

尼崎チーム、住之江区チーム、浪速区1チーム、浪速区2チーム、浪速区3チーム、の順番でプレゼンテーションを実施しました。各チームが1ヶ月半をかけて取り組んだ「フィールドワーク」「インタビュー」「課題の発見」「解決策の立案」までの内容を、プレゼン資料と共に発表しました。各チームの発表後には、地域コーディネーターからのコメント、参加者との意見交換を実施しました。全チームのプレゼンテーション後には、地域コーディネーターからの全体講評を実施しました。

交流ワークショップ

受講生と参加者との交流、ソーシャルデザインへの理解の深化、受講生のSMD講座の振り返り、以上を目的として交流ワークショップを実施しました。まず、4～5名のグループに分かれ、プレゼンテーションやSMD講座を通して気づいたことや感じたことを共有しました。次に「ソーシャルデザインで大切なことは？」というテーマをもと、同じグループで対話する時間を設けました。最後に、受講生と参加者それぞれが「ソーシャルデザイナーとしての最初の一步」についてシートに記入し、全体で共有しました。

ラップアップ

公開プレゼンテーション、及び、SMD講座の締めとして、公益財団法人都市活力研究所の三本松氏に全体講評をいただきました。

<各チームの発表内容>

●尼崎チーム

プロジェクト名：子どもによる商店街ツアー

設定した課題：

- ・尼崎市の三和本通商店街ではイベントでの盛り上がりが見られているが、来場者が顧客に結びついていない。運営は外部の人に頼っている。イベントに協力する店舗が一部であり商店街店舗内でも温度差がある。
- ・関西国際大学生が商店街内で子どもの居場所づくりを行っており、地域の小学生が通っている。
- ・地域リソースである関西国際大学生・地域の小学生を巻き込み、商店街を愛する地域の方々のスキルを活用でき、商店街加盟店に対して付加価値が出るようなコンテンツを実装することで、それぞれの立場の困り感を解消することができるのではないか。
- ・子どもと大学生が協力して各店舗の“売り”などの情報をアンケート・聞き取りにて情報収集する。
- ・商店街ツアーは先行事例があるが、NPOや地域の方が主体である。主役を子どもたちとすることで新たなコンテンツとしての価値を出す。

地域コーディネーターのコメント：

一段と商店街を楽しみたくなった。どんどん商店街は寂れていっているが、これからもなくしたくないもののひとつ。ぜひ私たちも一緒に楽しんでいけたらと思う。

質問：大学側の教員や組織の中の人たちで関わりを持っている人がいるのか、それとも学生たちが自由にのびのびと関わっているのか？

回答：大学ゼミの事業の一環として、尼崎市の事業募集に応募され、実施されている。地域と大学とをつなげていきたいとの強い思いを持って取り組まれている。

質問：「5年後のビジョン」とあったが、5年経つと学生の大半も卒業して入れ替わりがある。育てていく観点で見ると地域に残る人たちは必ずしも学生ではないのでは。プロジェクトを継続していく上での商店街側のメリットは何か？

回答：5年後のことは正直分かっていない部分もある。仮に今回のプロジェクトが実現しなかったとしても、地元小学校の総合学習のプログラムとして取り組むなどの派生はあるのかなと思っている。

質問：このプロジェクトに大学生はどれくらい関わり、どれくらい意見が反映されているのか？

回答：現状はゼミの先生に話をし、これから学生に下ろしていくという段階。やるとなった場合は大学生に全て考えてもらい、私たちはそれをサポートしていきたいと考えている。

●住之江区チーム

プロジェクト名：祝ってつながるHAPPY BOSAI DAYプロジェクト

設定した課題：

- ・住之江区新北島地域はマンションや市営住宅が建ち並ぶ住宅街で、大和川沿岸の海拔ゼロメートル地帯。そのため、災害時における津波や高潮・洪水による浸水被害を受ける可能性が高く、防災についての意識をより高く持つ必要のある地域である。

- ・地域住民の防災意識は高いものの、積極的に何かに取り組んでいる住民は少ない。先進的に取り組んでいるマンションはあるが、他のマンションや全体に広がっていない。
- ・防災に関して課題意識を持つ地域プレーヤーへのヒアリングを通じ、地域内での防災活動をつなぐコーディネーターがいないこと、垂直避難時の住民同士の関係性ができていないこと、学校園と地域との関係性が希薄であることが分かった。
- ・災害時には一時避難として垂直避難が必須であるが、垂直避難では地域住民・市営住宅住民同士の助け合いが必要。しかし横のつながりがなく、それぞれのコミュニティをつなぐ人や場がない。
- ・地域に開かれている場所であること、世代を超えた多様なコミュニティが創出できるのではないかと、園児避難にあたっての保育士と市営住民との関係性づくりの優先順位が高いのではないかと、園児避難に着眼し、「保育所」に着目し、保育所を中心としたつながりづくりを第一歩として取り組む。
- ・市営住宅の住民を対象とした「誕生日会」「防災絵本づくりワークショップ」を保育所で実施する。市営住宅の住民と保育士・園児が顔見知りになり、災害避難時のサポートや自然と助け合う関係性をつくる。そうした取り組みを中心に、地域全体で防災意識を向上することを目指す。

地域コーディネーターのコメント：

私たちでは思い浮かばないような可愛らしいプランを考えていただいた。保育所に目をつけたのがそこにいくのかと思い、やってみたいと思った。本来区役所がコーディネートしていくべきかと思うが、まだまだ小さな単位まで手が伸びていないのが現状。こうした具体的な案をいただくと、これをモデルにしてやってみたいというように思う。ぜひ参考にさせていただきたい。

質問：市営住宅と保育所との関わりについて実現可能性があまり見えてこなかった。それぞれの規模感や年代構成などを知りたい。

回答：市営住宅は比較的大きめの規模。4棟に分かれており、全て合わせると恐らく400世帯程度。保育所は概ね130名程度が在園している。市営住宅の年齢層については不明であるが、現地調査では高齢者が多かった印象がある。

質問：プロジェクトに対して思ったことや、こうしたいなというビジョンや想いは？

回答：ヒアリングで最も印象に残ったのが「コーディネーターがいない」ということであつた。官のコーディネーターはいても、民間のコーディネーターが不足している。外部から行政ではできないサポートをできる人材がまだまだ足りていないと感じた。

●浪速区1チーム

プロジェクト名：naniOne

設定した課題：

- ・浪速区には外国人、教育、子育て、貧困、孤立、治安、住居等、さまざまな課題がある
- ・地域コミュニティの課題解決に向けて自主的に個別で動いている人たちはいるが、何をやっているかお互いに知らない状態であり、もったいない状況である。
- ・コミュニケーションのプラットフォームを通じてそれぞれで活動されている想いを持った方々の意見が集まれば、小さな活動が大きな活動になっていたり、まちを良くしていきたいという想いを共有できるのではないか。
- ・「naniOne」を通じて個人の活動が行いやすくなり、活動がさらに活性化していく。浪速区のイメージも向上し、住みたいと思うまちになるような好循環を生み出していく。自発的なつながりで持続可能な社会をつくる。

・「OMOR0728」浪速区民でつくるコミュニティラジオ。地域の方々が発信できる場所をつくる。防災無線が聞こえにくいという地域課題にも対応し、防災情報も流していく。

地域コーディネーターのコメント：

「みんなが総合的につながる」という結論はまさしく浪速区のだ真ん中の課題。我々としてもこうしたゴールを描いている中で、さまざまな価値観や多民族の中でまだまだたどり着けていないところに、具体性はともかくとしてゴールはここだなと改めて感じられた。また、浪速区はめっちゃ面白いところだと言っていたので、浪速区をテーマにさせていただいてよかったかなと思う。これからどんどん浪速区面白いで！ということを皆さんに伝えていただければと思う。

質問：オンラインサロンをやるのか？

回答：オンラインサロンにしまうと「内」と「外」ができてしまう。「naniOne」という象徴の中でそれに賛同している人たちが自由に情報発信をしていく形をつくりたい。

質問：活動の場は具体的にどのようなところを想定している？

回答：活動の「場」は想定していない。ロゴやブランディングという象徴の中で、地域の人たちの自主的な活動への意識づけを目指したい。

質問：プラットフォームをつくるということか？Webサイトをつくってそこに人が集まるイメージでいたが、プラットフォームはラジオ局なのか？

回答：「naniOne」は浪速区の活動をしている人たち全体へのブランドイメージ。その活動を発信するツールとしてラジオ局を活用したいと考えている。

●浪速区2チーム

プロジェクト名：なにわの「わ」プロジェクト ～世界一周が体験できるまち～

設定した課題：

- ・浪速区は外国人居住者の割合が全国的に見ても多い。日本全体で外国人居住者の増加が見込まれる中で、浪速区は「課題先進地」と言える。一方、日本にいながら外国人とふれあえることができるというポジティブさも持ち合わせている。
- ・外国人居住者と関わる機会の多い学校現場へのフィールドワークを通じ、外国籍の保護者とのやりとりで課題が生じていることが分かった。外部調査によると、特に母親に対する支援が充実しておらず、困りごとがあっても信頼できる相談相手がいない。身近に相談を聞き寄り添ってくれる人や繋がりが求められている。
- ・「なにわキッチン」各国の家庭料理を通じて地域住民との交流の場を設け、社会との接点が少ない外国籍の母親の自尊感情や自己肯定感を高める。文化などの相互理解を深める。
- ・「なにわ写真展」写真を通じて自分の思いを表現できる場をつくる。外国人目線で切り取った地域について展覧会を行う。
- ・浪速区にいながら多文化共生が体感できるまちを目指す。

地域コーディネーターのコメント：

浪速区の外国人居住者は約15%程度。外国人居住者と日本人の共生への課題については地域の方に話してもフリーズされているので、こうした取り組みがあることはいいかなと思う。ぜひ実現していただければと思う。

感想：プロジェクトに共感する外国人の方もメンバーに入れて、より多様なメンバーで考えていければいいなと感じた。

●浪速区3チーム

プロジェクト名：みんなのブカツ!!なにわくさん

設定した課題：

- ・浪速区は外国人住民が増加している。また、単身者の多い地域でもあり、外国人住民においても単身者が多い。
- ・育ってきた文化が異なることから、コミュニケーションにおいて伝わりづらい場面が多い。特に言語やルール（ゴミの捨て方など）の意思疎通ができず困っているケースがある。単身者は特に寂しさを感じているとの声もあった。
- ・「在住外国人が必要な情報を受け取り、不安なく過ごせる社会」「浪速区内で役割を持ち、“なにわくさん”として生活できる社会」を達成するため、自分の好きなこと・やりたいこと＝部活動を通じてつながりをつくっていく。単身者の社会参加を促していく。
- ・「ユークチュ部」在住外国人をターゲットに、日本のルールやマナーをおもしろおかしく発信する。

地域コーディネーターのコメント：

外国人住民とのコミュニケーションが浪速区の大きな課題の一つ。多文化共生は福祉の分野の側面もある。ルールはお互いに知らないと分からない。そういったものにIT等のツールを使って発信していったお互いに理解していくことが大事である。サードプレイスの要素を「部活」と命名して発表されていたところにセンスを感じた。

感想：YouTube以外のアイデアはあるのか気になった。例えばプロカメラマン付きのInstagram講座やツアーガイドに教わるまちあるきなども可能性としてできるのではないかと感じた。

質問：外国人支援をテーマとして取り上げた理由を知りたい。

回答：無数にある地域課題の中で、チームメンバー4人のリソースと一番相性のいい課題にフォーカスすることが、地域に一番貢献できるということを大事にテーマを考えたため。

【全体講評】

浪速区 平井氏

外国人問題の話題が突出しているという印象を受けた。この10年でものすごい変化が起こっているが、そのひとつにインバウンド問題は避けて通れない。24区の中でもニューカマーな外国人住民の比率が高い浪速区は突出した例であるところも否めないかなと思う。経済の混沌や人口減少が進む中で、次世代はお互いに理解して日本の経済を盛り上げていかないといけない。これからのビジョンとして、従来の「増えていくことが発展」「エントロピーの拡大」から「収縮していく役割」が必要であると感じている。「まち終い」と言うとマイナスなイメージだが、整理し、シェアし、お互いに理解しながら“始末”して生きていくことが次世代のまちづくりではないかと肌で感じながら仕事をしているので、そういった着眼点の発表があったことは評価できるのではないかと感じた。

住之江区 渡邊氏

みなさんプレゼンやスライドが上手で羨ましいと感じた。住之江区の提案においてもデザインも大事になってくるのではないかと思いますので、「防災×デザイン」の考え方も今後もっと取り入れていきたいと感じた。

コトハナ 西川氏

既成の枠にとらわれず自由な発想で、今までの文脈で考えるのではないジャンプがそれぞれのプランの中にあったのが面白いと感じた。ここからいろんな可能性が生まれて突破していけるのではないかと感じた。今回のプログラムの3ヶ月半で正直崩壊するチームがあるのではないかと考えていたが、みなさんの中で違いを力に変えていろんなアイデアや発想が生まれてきたのかなと感じることができた。それ自体が今後社会課題の解決や地域を盛り上げていくために欠かせない部分であると思う。普段同じ価値観や得意なことを持っている人が集まりやすい世の中で、そうでない活動を3ヶ月半してきたことは大きかったのではないかと思いますので、いろんな現場で継続していただければと思う。出してもらった提案をぜひ前に一方で進めていってほしいと期待している。

<参加者の主な感想>

- ・他チームの発表を聞くことで自チームのプロセスとの対比ができ、新鮮な驚きと発見があった。
- ・公開プレゼンテーションがあることでチームのまとまりが増していた。
- ・アイデアに対してオーディエンスから思いもよらなかった指摘があり、学びになった。
- ・スケジュールや環境から言って当然ではあるが、全体的にアイデア出しにおわりがちなことが、何か物足りない。

